

第二部

インタビュ



海軍での軍隊体験

浅岡 春男

(一年間の徴用)

私は、戦時中墨田区に住んでおりました。徴兵検査がありまして、痩せていたので第二・乙種(甲、乙、丙の順に適性をランク付け、一つのランクの中でさらに第一種、第二種)となり、一年間徴用で引つ張られました。葛飾の青砥の軍需工場に行きました。軍隊と同じように厳しかったですね。

(徴兵で海軍へ)

徴用の一年後に召集となり、私は赤紙ではなくて、白紙です。召集令状の赤紙というのは現役の人で、白紙は適性検査でランクの低い人や、徴用から引つ張った人等だと聞いています。昭和十八年五月一日、横須賀の海軍に入隊しました。教育を受ける必要がありました。先輩とかの噂では「お前たちは食事がいいから、おそらくよそへもってかれるよ」って言われ、実際に十日ぐらいたつと、上海の陸戦隊行きとなりました。生まれが墨田区で近くに荒川があり、水泳が得意でしたので海軍に配属されたのです。上海で三ヶ月の教育を受

けて、日本に帰れました。横須賀では、私の乗った軍艦は形が古くて戦闘には不向きで、運輸部付けの輸送船に乗りました。海軍では、ずいぶん怖い思いをしました。一番記憶に残っているのは、九州の豊後水道という航路があるんです。そこにアメリカ軍が夜中に、破裂しない爆雷を落としていくわけですよ。我々は飛行機も来ないし、大丈夫行こうというところで行くでしょう、そうするとスクリーンに吸い付き、ドーンドーン。いくら上を見ても機影はありません。そういうのが何回かありました。機械は壊れましたが、沈没はしなかったので助かりました。

昭和十九年の夏か秋に、出航前の戦艦大和を見ましたよ。すごいですね。私たちの船が壊れて修理のために呉のドックに入った時です。その晩に、アメリカ軍の攻撃がありました。呉は大きな軍港で、軍艦なんかがありますからね。凄いですよ、機関銃の弾が四十ミリですよ。私たちの弾は十三ミリですよ。私はたまたま一週間前に、大砲の後部にある弾込めの要員に配置替えになっていたので助かりました。その戦いで、私の後に交代になった後輩が、弾を体に十発ほどくらって即死ですよ。ほんとに運命はわかりませんね。

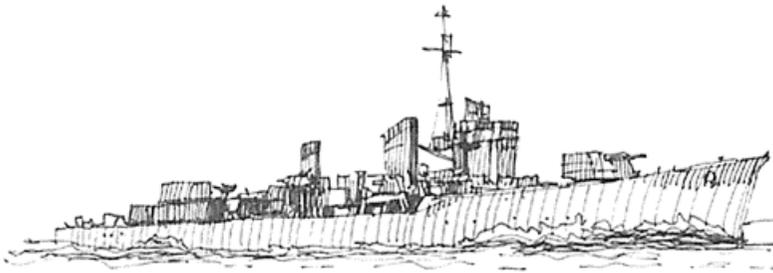
(若い人のへメッセージ)

若い人に伝えたいことは、まずね、命です。命を粗末にしては駄目です。それから礼儀も大切にして欲しいです。感謝

の気持がなくなると駄目だと思うのです。昔、親にご飯を食べて、米一粒残すと目がつぶれちゃうとよく言われましたよ。人間の文明が進み過ぎちゃうとよくないですね。



浅岡さん本人



第二部 (インタビュー・軍隊)

兵役で被爆地体験

石松 勝

(原爆が広島へ)

私は、昭和二十年八月、広島県東広島市、昔の西条町に軍人として駐屯しておりました。少尉という立場で、本隊の連絡係でした。忘れもしません八月六日、飛行機が四機、南の方から飛んで来まして、通り過ぎて空襲警報が解除になったんです。そして、解除になった後、三機が帰って来て、一機が下に降りて爆弾を落としたんだと思うんですね。私たちのところから、二十キロから二十五キロ離れておりまして、間に山があるんです。落下傘みたいな物に筒がついていて、なんかブラブラしているのが見えたと思ったら、ピカって光って、暫くしてからゴロゴロ、ゴロゴロという、雷サンみたいな音が聞こえてきました。音は、ピカドンのドンだけではなくて、私の所には、反響して聞こえてきました。ゴロ、ゴロ、ゴロ、ゴロとだんだん小さくなるんですけど、木霊(こだま)が反響してくるんです。しばらくしてから、雲が上がってきました。私たちは、東北の方から見ていたんですけど、雲に

朝日があたって、黒いと白ところの間が、プリズムでもって七色の虹のように光って見えました。だんだん雲は上に昇って、広がっていききました。そして一面に広がって、それから雨が降ってきました。

(広島へ救援に)

広島の状態は、山の陰で判らないわけですから、火薬庫に、爆弾でも落ちたんだと思っていました。連絡の通信も無いし、そのまま演習をやっていました。昼時になって、丁度食事が終わって、暑い日でしたからゆっくりしているところに、連絡の人がきたんです。いきなり、中尉の人が入って来て、階級証もつけないで、「広島に特殊爆弾、広島壊滅、貴隊の救援を請う」と言って、その場にその人も、疲れが出たんでしょ、ね、ぶっ倒れてしまいました。その人は、ブドウ糖を打って、一晩休んで帰って行きました。我々の部隊には、歩兵隊です。から馬ぐらいで、運送手段がありません。隣の部隊のトラックに、うちの下士官も乗せてもらって、状況把握の為に、広島に向かわせました。しかし、途中まで行って、広島は焼け野原で、様子がまったく判らないという連絡が、まず入りしました。そして、夕方六時頃、おおよその状況が把握出来ました。我々の部隊は、千名ぐらいを、救援に向かわせる為に、

二本松と言う駅に止まっていた列車を利用して、広島までは行けないので、その手前の海田市まで行きました。そして、千名がその日の夜には、広島に入り救援活動を行いました。私はその日は、本部要員として連絡活動を行い、翌日広島に入りました。

(被災地での活動)

広島に入ってから、連隊と各中隊の間の指示系統が私の仕事でした。その日の広島は、暑い日で、道路はそこら中で燻ってる火と共に、照り返しが凄かったです。私たちは、生きていく方々を病院に運び、病院からは、死体を運んできて焼却するという仕事でした。本当に乱暴な……！ 生きてる人だって、トラックに積んで病院に連れて来ても、廊下に寝かせるだけで、屋根があるというだけで、……死んでいる人は、一箇所に積まれていて、それをまたトラックに積んで、運んでいって油をかけて焼くんです。助けると言っても、お医者さんも手のつけようが無いんです。医療の器具も、薬も無いですし、お医者さんも少なかったわけですから（涙と共に）川に浮かんでいる死体を引き揚げて、焼却したり、通れない道路の片づけなどを主としてやっていました。

(自分も被爆)

私も、翌日広島に入ったということで、被爆をしたことが後から判って、昭和五十一年に、被爆者手帳が交付されました。広島からの直後は、私も、頭の毛が抜けたり、下痢をしたりがありました。同じ部隊の中で二十五人が被爆が原因で亡くなりました。ある時、皆で五十人のお葬式をしたんですが、その後の調べで、二十五人の行方が判りまして、お寺の方から生き返りの葬儀をやらうと言うことで、二回もお葬式をやりました。

(終戦を迎えて)

玉音放送(終戦の天皇のお言葉)は、”偲(しの)びがたきを偲び”と言うことぐらいしか判らず、皆で聞いていましたので、ラジオも聞き取りにくく、前の方にいた人が負けたんだと言うぐらいで、後で皆で話し合っただけで確認しました。まあ、私は、負けそうだなということは、思っていました。昭和二十年の一月から三月まで、鎖骨を折って箱根の療養所に入っていたのです。そこに、小岩井少佐という方がおられて、毎晩お話をしてくれまして、日本の発表とアメリカの発表の違いを聞いてガツカリしました。アメリカからのビラや、日本の戦力などの情報ですけど……、日本には、弾薬もなく、黄

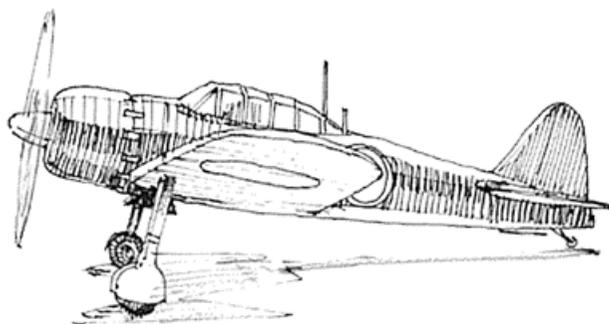
色火薬も千人に一個分しか無かったわけです。実際、私たちの部隊も、全国からの千人と合わせて、三千人が箱爆雷(はこばくらい)という訓練をしたわけです。アメリカが攻めて来たら一人一人がアメリカの戦車に対し、箱爆雷を投げつけるというものでした。

中隊長一人が、富士の麓に行きまして、その訓練を受けてきました。帰って来てから、見たことも無い箱を作って、毎日日箱を投げる訓練をやるわけです。タコツボという一人が入れる穴に入って、安全ピンを抜いて投げるわけですけど、今考えると馬鹿ばかしいですよ。自爆の特攻ですけど、効果も疑問ですけど、火薬が無いんですから。それから、七月に編成が終わった部隊で、小銃が全員に行き渡っていない、飯ごうというのは、アルミのいわば弁当箱ですけど、孟宗竹(もうそうちく)を輪切りにした食器ですよ、配られたのは! 金属自体が無かったですよ。我々は、それでご飯を食べました。それと、普通、召集を受けて部隊に来ると、新しい下着に着替えて、古い物は持って帰るんですが、ほとんどが古下着のままでした。もう、渡す物資が不足していたんです。

(平和への思い)

あの当時、私は独り者でしたけど、家族を持っている人は、

大変な思いをしたでしょうね。今外国で、戦争が色々ありますが、人間的に見て憐れだなど思うのと、本当に教育の大切さを考えて欲しいと思います。そして、私たちは戦争が当たり前の教育を受けましたが、戦争は、本当に恐ろしいものだとやることを、戦争体験者として、日本の子供たちに心から伝えたいと思います。



第二部 (インタビュー・軍隊)

軍隊生活と鳩

佐藤 四郎

(張鼓峰事件)

昭和十一年が二・二六事件だから、その年張鼓峰事件(満州国とソ連との国境紛争—一九三八年)がありました。

位置関係を説明しましょう。ウラジオストック、ソ連の領域ね、そして満州、当時日本が中国に作った国で、日本の勢力下です。豆満江(北朝鮮と中国の国境)があり、張鼓峰の高い山に登るとウラジオストックも、朝鮮も満州も全部見えるの。だから日本軍ばかりでなく、ソ連軍も狙っていました。憲兵隊に、松島伍長という私より半年先輩の人がいたんです。その人が、どうも下からソ連が上がって来ているらしいと言っています。それで三名で偵察に行くと、一人が狙撃されて死んでしまいました。それが張鼓峰事件の事のおこりなんです。

(情報合戦)

それで今度は、遺体を引き取りに行かなければいけない、ところがソ連の狙撃兵がいる、昔からソ連は狙撃がもの凄く上手でしたからなかなか接近できない。このことを朝鮮司令

部に報告して、司令部から日本の陸軍省に報告し、外務省がソ連に遺体を引き渡すように要求したんだけど、どうしても渡しません。とにかく近くに行くのと、撃たれてしましますから東奔西走しました。そのうちに、ソ連軍も兵力を増やしてきました。これは、事が大きくなる可能性が出てきたということで、情報合戦になってきたわけです。ソ連軍のスパイが近くまでたくさん来ていて、様子を探りながら兵力を増やしてきている、これは一戦交えるしかないということになってきたわけです。それでここが十九師団、こっちが二十師団。十九師団は、二十師団に、兵力の増員を要請したわけですけど、その要請情報が二時間後には、ソ連には筒抜けになっていました。ソ連の諜報網（スパイ網）が、いかに優秀だったかということですね。

（国境での戦闘）

それから国境線というと、金日成が、今の北朝鮮と中国との国境あたりを荒らし回っておりました。日本軍の中隊が金日成の部隊の鎮圧を命じられました。中隊ってわかりますか？ 軍隊には連隊、大隊、中隊、小隊、分隊があります。このあたりの兵隊は、関東出身者であったのが、当時は私もそうですが、東北出身者が多くいました。国境守備中隊が討伐に向かい、北朝鮮から満州に少し入ったところで夕方になり、夜

営（テント等による野宿）をしました。このあたりは、日本軍が入れないところで、地図も詳しいものがない、地図上の白色地帯です。そこでたまたま、金日成軍も夜営をしていたのです。向こうの山の陰から、朝鮮の唄を歌って大騒ぎしている声が聞こえてきました。すぐ中隊長が「様子を見てこい」と斥候（相手を探るスパイ）を出したんです。相手は、飲めや歌えの大騒ぎをやっていました。中隊長が一個中隊を引き連れ敵を包囲し、夜襲をかけたんです。銃撃戦の最中に我々の軍医が顎を鉄砲で撃たれてしまい、なんとか仇を取らなければならぬと頑張ったんですけど、結局敵には逃げられませんでした。軍医を陸軍病院に連れて行かなければならないと、連絡しようとしたのですが当時は連絡手段が簡単ではありません。通信兵が苦勞して、無線で中隊本部に連絡し、そこから病院に電話して応援を頼んだんです。私は、軍医に付き添い移動をしていたんですが、何しろ地図のない密林の中ですから、我々の位置とか軍医の病状を知らせなければなりません。当時、私は伝書鳩を何羽か持って歩いていました。いつも可愛がっていました。一羽一羽に報告文書を持たせて飛ばしていたのですけど、とうとう最後の一羽になってしまいました。その鳩が、生まれて三ヶ月の幼い鳩で、とっても可愛がっていた鳩だったんです。可愛くていつも連れて歩いた鳩でした。そして朝になって、どうしても連絡のため飛ば

さなければならなくなり、本当にたどりつけるか心配でしたが空に放ちました。しかし、鳩は近くの枝に止まったままジツと私を見つめています。早く行けと合図しても飛びません。私はみんなのためにも無事に着いてほしいと強く願いながら、その場を後にしました。後から判ったことですが、私の報告文の内容を中隊本部が電話で病院に知らせたそうです。今でもどんな鳩を見ても可愛いですね(笑)。

その後は、現地の医者的心得がある者を捜すことにしました。村の人たちの中には、日本軍に好意を持っていた人たちも多くいたので、私も顔見知りの人がいた山頂の村まで行きました。そうすると、金日成がこの村に入り込んでいるという情報が入りました。その時、金日成が私のそばを通ったんです。すれ違った時に、背が高く頑丈な体をして右後頭部に特徴的なコブを見たので、これは間違いないと思い日本語で呼びかけたら、日本語がわかるみたいで、ハツとしていました。すぐ拳銃を突きつけ、捕まえました。そして一個小隊のいるところに連れて行き「逃げてもし良いけど逃げたら殺すぞ、もし逃げなければ命は保証する」と言いました。皆には粗末に扱うなど、申し伝えました。その情報が直ぐ仲間に伝わったのか、一味は逃げてしまったようで、その後村は静かでした。私たちは、金日成を中隊に連れ帰りましたが、憲兵隊の刑務所に入らず、私の部屋に預かりました。本部の指示があ

るまでは、お前の命は保証するから一緒に行動しろ、夜も俺の部屋で寝ろ、もし逃げる時は俺を殺してから逃げろ、そうじゃないと、後で俺が大変だからと言いました。一週間後、本部に連れてこいと指示が来て、憲兵隊本部に連れて行きました。そうすると私に対しての次の指令が出て、「次はもう一人と一緒に蒙古行きだ、体だけは大切にしろ」と言われました。そこで金日成とはお別れとなります。金日成とは一週間一緒にいましたが、別れの際に「略奪は悪いとわかっていたが、食べるためにやった、あなたがお国のためにと思っているのと一緒に、国のためにやっている。また会う機会もあるでしょう、体を大事に」と言っていました。私は、この人物は将来すごい大物になるなど当時も思っていました。

戦地を転々とし、終戦は二十九才の時ですね。徐州の南にいました。徐州、徐州と人馬は進む(軍歌)、あの唄の中国の徐州ですよ。三十歳の時結婚しましたが、中国人の援助で物資には困りませんでした。

哀しい陸軍の兵隊さん

佐藤 孝隆

(戦前の軍隊の印象)

私は昭和五年(一九三〇年)生まれです。家のすぐ裏が昭和十一年、軍部が時の政府に対して反乱を起こし有名になった二・二六事件の本拠地麻布三聯隊(三連隊)でした。

毎朝、家の前を、軍歌を歌いながら代々木の練兵場(今のNHKが建っているあたり)に訓練に行きました。夏の暑い日でも、帰りは練兵場から麻布三聯隊まで駆けて来ます。重たい背囊(はいのう・兵隊用のリュックサック)を背負って走りますから、身体が耐えられず、私の家の前辺りではたばた倒れる兵隊さんが幾人もいました。正門がもうすぐ目の前なのに門に入る前に倒れてしまうのです。そうすると近所のおばさんや私の母親が、近くの氷屋さんから氷を買って来て介抱していました。私も、手伝った経験があります。朝は起床ラッパ、夜は消灯ラッパの音が聞こえてきます。兵隊さんたちはおそらくベッドの中で遠い故郷の親や兄弟を思い出しながら、涙を流していたかも知れません。そういう哀しい思

い出があります。六本木から青山一丁目の方に行く右側が最近まで防衛庁のあった麻布一聯隊で、その向かい側の奥に三聯隊がありました。また、市谷の陸軍参謀本部に勤務していた陸軍少将の人が、毎朝私の家の前を迎えの車で通りました。歩いて軍歌を唄いながら通る兵隊さんと比べて、子供心にもずいぶんいい身分だなと思いました。

(神奈川で終戦)

昭和十九年八月、新潟に疎開しました。そして当地の高等小学校を翌年四月卒業して、家に帰り、すぐに神奈川県の小田急線東林間にあった海軍の工場に徴用され寮に入っていました。工場には日本人以外に大勢の台湾人が働いていました。そこで終戦を迎えました。私の子供の頃は戦前、戦後を通して食糧事情が悪くて皆が苦勞をしましたし、学校も本当に勉強どころではありませんでした。

軍隊生活と戦後の暮らし

関口 慶二郎

(志願兵・軍隊生活)

家は、今の新橋二丁目、前の田村町二丁目です。田村町というのは、昔は家具屋さんの町でした。有名なんですよ。家具は、芝田村町と言いましたね。横浜の元町もそうですよね。腕の良い職人さんが沢山いますよ、家具で栄えていました。戦争になったために、疎開した方もいたそうです。私も父と家具屋をやっていましたけど、国民徴用令(国家総動員法で、戦争協力のため各所に動員される)で、私も軍需工場へ回されていきました。今でも思い出しますが、浅草の業平橋の先に大日本機械工業という自転車の会社がありました、戦時中は海軍の機関砲の弾を作る工場になっていました。私は、その工程の中の弾に焼きを入れる熱処理という仕事をしていました。熱を加えた弾を油の中に入れて、それこそ真っ黒になつてやるわけですよ。そのうち、少しでもお国のためになりたい、私も軍隊に志願したのです。当時皆そうですよ。海軍のポスターもいっぱい貼つてあるし、予科練の歌もあるしね。私は、海軍に志願しました。当時は、満二十才で徴兵検査が

ありまして、その後に召集令状が来るわけです。戦争のない平時では、軍隊生活は二年間で帰つてくれます。ところが、戦時下では一回除隊になつても、また召集されるわけです。

私は志願兵として、乙種で海軍航空隊の飛行予科練習生になりました。始めは三重の航空隊に入りました。三重の航空隊で訓練をして、それから台湾の高雄(たかお)へ配属されました。台湾へは三百人くらいが普通の輸送船に乗り、昭和十九年に行きました。飛行機の操縦法を習うとともに、厳しい訓練をしたのち私は戦闘機じゃなくて、爆撃機の射撃と爆弾を落とす方へ回されましたが、そのうちに、台湾の空襲で隊の施設が破壊されたので爆撃の被害跡を片付けたり、残つた兵舎で勉学に励んでいましたが、五ヶ月ぐらいたち、また内地へ返されたんですよ。帰りの船は危なかつたですね。潜水艦に撃沈されるといふ噂があつて、夜動いて昼はなるべく港に停泊して、それでまた夜出航です。もちろん護衛の駆逐艦などいたのでしようけれども、私たちにはよく判らなかつたです。

内地に帰つてからは厚木の航空隊で訓練し、そこで終戦になりましたので、軍隊生活は一年半ですね。私の兄は陸軍に現役で入つて、西部ニューギニアのマノクワリというところで戦死しました。弟も陸軍でしたけど、弟と私は無事に帰ることができました。

(軍隊での思い出)

三重の航空隊の訓練は、厳しかったです。自分が悪いことをしなくても、全体責任でしたから太い手作りのバットの様なもので思いきりなぐられました。志願兵の一人が便所で煙草を吸ったのが分かっても名乗り出ないから、全員尻を思いきり順番に殴られるんですよ。青あざがすぐくて夜も寝れない思いをしました。厚木航空隊では分隊が分かれて下田の方へ連れて行かれて、モーターボートの簡単なものに爆薬をつけて、特攻隊となった人たちもいました。その人たちも終戦で助かったのです。私も、もし戦争が長引けば、そういう舟に乗せられていたかもしれません。上官にね、日本は負けないけど勝てないってことは、言われました。だから、終戦の玉音放送は良く聞こえなかったが、負けたのだと上官に知らされました。今思うと、父と母はどんな気持ちだったのかなと、思いますよね。子どもを三人も兵隊に出しちゃったからね。終戦になるまでは父と母だけでしよう、弟や妹は疎開だったから大丈夫でしたけど、兄が戦死したから心中大変だったと思いますよ。

(戦後の生活)

家は新橋だったので、戦後は駅前に闇市がすぐ出来てね。闇市は、屋台や薬で作ったムシロを敷いて、行商人が商売を

していました。家では、すいとか、かぼちゃ、さつまいも、そういうもので苦しい中で生活ができたし、ひもじい思いもしたが、なんとか食べてきました。家は空襲で焼け、皆で間借りをしていましたけど、虎ノ門にお得意さんの工場だけは残り、復員してから、家具職人として父と弟と三人で働きました。戦後は進駐軍の仕事をして、景気も一時的には良かった時もありました。仕事、仕事で働き、先ず家を建てる希望を持ち、充実した毎日でしたね。

(若い人へのメッセージ)

今の若い人の一部には愛国心が少ないのでしょうか。国を愛するということだけは、必要じゃないのかなと思います。我々だって、国を愛する、つまりは家族を守るために戦ったのですよ。これからは悲惨な戦争を止め、世界中で真の平和の時代が末長く続く様に心から願っています。

戦争の忘れられない三つの記憶

田中 清之助

(空襲で実家を失う)

私は、昭和二十年一月慶應大学在学中に、軍隊の物資を輸送する輜重(しちょう)兵科の幹部候補生として入隊しました。終戦の年で本当に戦争の末期でした。

戦争中、心に強く残っていることが三つあります。私が軍隊におりました時、今の西麻布、昔の麻布区筈(こうがい)町の家が三月十日の大空襲で焼けました。幸い父母は無事でしたが、次週の外出日に、自分の育った家が跡形も無く焼けたのを見て、涙をおさえることができませんでした。軍隊に帰って、教官にその話をしました。すると教官が、「家を丸焼けにされた仇討ちをする気持を強く持たないと駄目だ」と言い、その夜の会合で仇討ちを決意した話をさせられました。私は別にそういう意味で教官に話したわけではなかったのですが……。

(敵国兵も同じ思い)

もう一つは、B 29の乗組員の話です。四月頃のある日、輜

重兵学校近くの経堂のあたりがB 29に爆撃されました。経堂には高射砲の陣地があり、そのうちの一機が撃墜されたのです。乗っていたアメリカの搭乗員が、輜重兵学校の中に、パラシュートで降りてきて捕まりました。

それで学校の事務所に、私と東大出の戦友の二人が呼ばれ「お前ら、行って尋問しろ」と言われたのです。出掛けて行ったら、そのアメリカの兵隊の若いこと。我々も学校の途中で軍隊に入隊したわけですが、アメリカでも同じだなと思えました。そして「幾つだ?」と聞いたら、「十九才だ」と答えました。十九才で、B 29の搭乗員として連れて来られるのかと思つて、驚きました。「基地はどこだ」「君たちの基地にいる爆撃隊の編成はどのくらいだ」、色々聞きましたけど、全部笑いなながら、「知らない、知らない」って言うだけでした。東大の戦友が、「これは作戦変えなきゃ駄目だ」と言つて、軍の話止め、プライベートの話にしました。そうしたらここにこ笑いながら「自分は軍隊志願したけれども、実はフィアンセがいる。無事に帰れたら、結婚する約束になっている」、本当に、人が変わったみたいに話し出しました。だんだん話をしている間に、「戦争は嫌だ。人と人が殺しあうなんて」と言い始めました。B 29の搭乗員でも若い連中は、早く戦争が終わり、軍隊から抜けて幸せな結婚をしたいという願いなのだ

と思いました。ですから尋問しながら、戦友と顔を見合わせました。可哀相で、「お前は死刑になる」とは言えなかったのです。最初は言おうと思ったけれど、プライベートな両親と家族の話とか色々されると、「お前はもうすぐ殺される」とは、とても言えなくなりました。尋問を終えて「さよなら」と言うのと、「また会おうね」と答えました。私たちは、到底言葉を返せませんでした。翌朝、この若者は憲兵隊に連行され、刑場で命を落としたことと思います。私の軍隊生活の中でも、とても辛く忘れられない出来事です。

(母の背中の亡き骸)

もう一つは、三月十日の東京大空襲です。その時は、死体の収容という特別任務をやらされました。私たちの配属された所は、両国、錦糸町、亀戸、新小岩、小岩辺りでした。両国の国技館は焼け落ち、跡形もない有様で、見ていると寒気がするようでした。小岩から少し先で車を止め、あたりの様子を見ますと、見渡す限りの焼け野原でした。家を失った人たちが皆わあわあ、わあわあ泣き叫んでいました。私たちは一時間くらい歩いて様子を見ました。その時、目の前の防火用水らしい水溜りの中に、お母さんが赤ちゃんを背中に背負い沈んでいるのが見えました。お母さんはうつ伏せになって

いましたけど、赤ちゃんは仰向けになっていて、顔が分かるわけです。まあ、何とも言えないあどけない、その赤ちゃんの亡き骸を見ている間に、本当に悲しくってねえ。自分は今軍隊にいるけれども、戦争はこんな悲惨なものかという気持ちが強くなり、涙をおさえて車の荷台に、その赤ちゃんとお母さんの亡き骸を運び入れました。荷台が一杯になると、死体の仮安置所に運びます。

私たちは担当箇所が終わりまして、帰ろうとすると、ぎよつとしたのです。火に追われた人たちがみな隅田川に飛び込んだのです。隅田川はもう一面に死体が浮かんでいる状態でした。それを町の人たちが、先端にカギのついた棒で引っ掛けて引っ張り上げ、死体の山が出来ていました。焼け跡のお母さんと赤ちゃんの姿、ブカブカと一面に浮いていた隅田川の死体。大勢の人が、不幸せになる戦争は決してやってはいけないもので、この日に見た情景は恐らく一生忘れられないと思います。

(子どもたちへの平和の思い)

終戦後、塾長の潮田江次先生から、「田中君、ずいぶん大勢の先生方が亡くなられたので、よかったら幼稚舎の先生になってくれないか」と頼まれました。空襲で被害に遭った先生、

戦死された先生など、大勢の教職員の方々の欠員があり、私は恩師吉田小五郎先生のお薦めにより幼稚舎への奉職を決意しました。そして、学級担任として昭和三十九年、卒業国内旅行で広島に行き、子どもたちに原爆の資料館を見せ、慰霊塔をお参りしました。子どもたちは泣いておりました。私は連れて来てよかったと思いました。子どもたちに戦争の恐ろしさを知ってもらったからです。その次のクラスの修学旅行の時は、長崎に行きました。慶應の創始者、福沢諭吉先生の故郷が九州の中津だと言うことと、長崎の原爆の跡を尋ねて、亡くなった方のご冥福をお祈りしようという二つの目的でした。子どもたちに空襲の恐ろしさを知らせ、戦争は絶対にしてはいけないということは今後も伝え続けたいと願っています。

第二部 (インタビュー・軍隊)

戦後ロシアからの帰還

津布工 三代吉

(戦前の小学校)

戦前の小学校は、尋常高等小学校といひまして、小学校が六年間、その上に高等課があつて二年間でした。都会じゃ知らないけど、田舎では一つの学校に、必ず奉安殿(都会にもあつた)というのがありました。奉安殿と言うのは、天皇陛下と皇后陛下のお写真と、教育勅語が奉られているということでした。私も、中を見たことはありませんけど、朝、校門に入ると必ず奉安殿にお辞儀をして、それから教室に入ります。昔は、学校では勉強よりも戦争の訓練の方が優先でした。空気銃ですずめや鳩を撃って遊んでいました。そんな時代でした。

(厳しい軍隊生活)

私が群馬県の館林から、高崎の十五連隊に入隊したのは、昭和十九年の一月、十九才の時でした。その後すぐに、満州に出兵しました。満州の国境を、警備するために行ったので

す。普通の人は三八式の銃でしたけど、私は体が大きいので最初は小銃、それが百発百中でした。それから、軽機関銃を持たされました。

軍隊に入りますと、軍人直諭（明治天皇が軍人に下した訓戒）を全部言われます。五か条あるんですけど、それが出来ない人は、大変なことになります。「股を開け、もつと開け、もつと力を入れろ、齒を食いしげれ、上官の命は朕（チン）と殴られます。しっかりと立ってないと、体が飛んで、すぐ倒れちゃいます。口を結んでないと、切れてしまいます。上官の命令には、絶対服従なんです。そんな風に鍛えられていくんです。軍隊に入ると一番最初に、自分の名前と出身地、生年月日を書きます。そして、髪の毛と爪を置いておきます。遺骨で帰ると、誰が誰だか判りませんから、そのために書いておくんです。

最前線で、敵が向こうにいるでしょう、「進めー」否応なく進まなくてはいけない、後ろを向くとぶたれちゃうから。だから敵に軽機関銃を向けて、敵がちらちらと動くでしょう、動いたらそれを撃つわけです。でも、頭上げた瞬間に自分が撃たれる、兵隊へ行った人でないとそういう体験はわからないと思います。

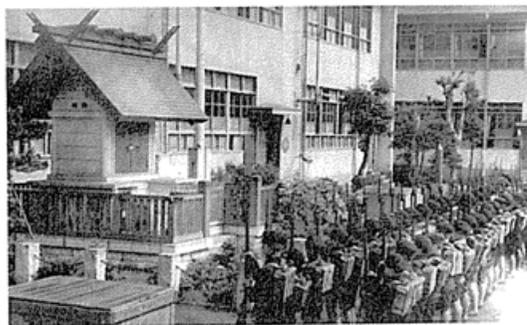
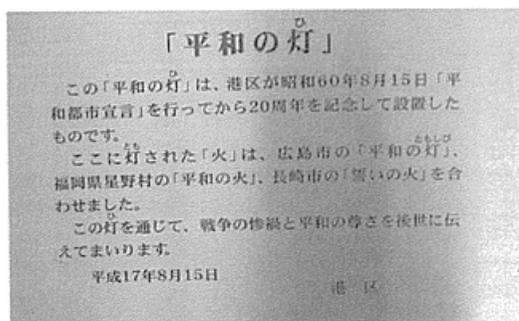
そして、日本が原爆でやられて、終戦となり、私は捕虜に

なりました、ロシアに送られました。重労働させられるわけですよ。それも毎日色々ですね。重労働で働きが鈍いと、叩かれるんです。道路とか、ソ連は広い国ですから、日本にいれば三度の食事は食べられますけども、ご飯もろくに食べられないんです。おそらく生きて帰れないと思った。必ず銃殺か絞首刑じゃないかと覚悟を決めていました。日本が満州を警備した時、ロシアの兵隊を殺しているから。当時はみんな、捕虜になれば殺されると言っていましたから。そうでしょう、日本の兵器を全部ロシアに渡して、「私はもう降参するから、戦争はしません」と言って、銃を渡す際に、菊の紋（天皇陛下のご紋）を「やすり」で削って、渡したわけです。降参してるわけですからね。私の兄貴は南方、マレー半島へ行きました。よく日本へ帰って来たと思いますよ。

（終戦後）

日本の港は、下関に着きました。東京はもう焼け野原ですよ、焼夷弾で。日本の家屋は、今は鉄筋コンクリートだけど、当時は木造だから、焼夷弾落とせば燃えちゃいますものね。ある時、宮城に清掃に行きました。天皇陛下とわずかな、この廊下くらいの所で天皇陛下とお会いして、「皆さんは戦争に行つてごころうさんでした」って、天皇陛下が私らに頭を下げたよ、「ごころうさんでした」って、昔だったら、とてもと

でも、天皇陛下の近くで顔を見られませんかよ。遠くの方で拝んでいましたよ。顔なんかとつても見られない。姿見られないよ。



奉安殿と小学生／毎日新聞

満州で終戦帰国

木村 泰三

(行く予定の学校が被災)

昭和十六年、栃木県宇都宮の旧制中学校に入学し、農家に勤労奉仕に行き、春は麦刈り、夏は田植え、冬はパイプの排水作りなどを行ないました。主にあった授業は体操、軍事教練、鉄砲、三八式歩兵銃を持つての訓練でしたね。大学予科に行く予定でしたが、爆撃で学校が焼けたため行くことができず、やむなく中学に残り、飛行機を収納するための土手作りを手伝いました。

東京大空襲の時の炎や、群馬の中島飛行機の空襲も宇都宮から見えました。上野に行くと、西郷さんの銅像の場所から、浅草、東京湾まで見ることができくらい一面が焼野原となっていましたね。当時、満州で航空隊の司令官をしていた父が「満州は安全だ」というので、六月十八日に宇都宮を出発し、下関から関釜連絡船に乗り、釜山から列車を乗り継ぎ満州まで行きました。

八月九日、ロシアが満州に爆弾を落とし、軍人の下士官以上の家族は南方に疎開となり、ハルピンに向かいます。終戦を知ったのは、その日の夜六時です。ロシア軍がトラックでやってきて、私たちの武装解除を行いました。満州の農民が長い鎌を持って集まり、不穏な空気が流れましたが、満軍の将校がたまたまやってきて、銃で追い払ってくれました。次の日、ロシア軍が兵隊を引き連れて来て、鉄道のあるところまで歩かされました。その隊列が、延々と丘に続くのが見えましたね。私たちはその後逃れて、一ヶ月位縁の下に隠れる生活をします。

季節が夏だったので、野菜や鳥などを盗んで食べ、飢えをしのぎました。その後、荷物をまとめハルピン駅のそばのビルに収容してもらいました。毎日のように栄養失調や寒さで、どこかで誰かが亡くなっていました。チチハルに移り豆腐屋の生活を八ヶ月ぐらい行いました。言葉も大して話せなかったけど、生きるために必死でしたね。

その後、国民政府(後の台湾政府)が入ってきて、その周りを中共軍(現中国政府)に囲まれました。中共軍は、日本の大砲で国民政府軍を撃ち、国民政府軍は逃げましたが二、三百人は捕まり、捕まった兵隊はさん壕の周りに立たされ、

撃たれてざん塚に埋められました。

昭和二十一年八月、日本人は帰国となり、チチハルからコ口島に向かい、十月に引き揚げ船に乗船、途中台風にもあいながら一週間かかり日本に着きます。赤痢発生の疑いで、二週間洋上で足止めされ博多港に上陸。アメリカ軍の検問を受け、ようやく宇都宮に向かいました。幸いに、私の家は焼けていませんでした。

第二部 (インタビュー・外地)

上海から子供と日本へ

長田 睦子

(上海で終戦)

父は孫文の辛亥革命(一九一一年、中国で起きた革命、共和制を宣言)の時に、孫文の顧問医として中国へ渡りました。私は中国の上海で生まれました。父は医者ですから中国の人からも慕われていました。北一輝氏が上海に来た時に、家でお書きになった本で『支那革命外史』に父が出てきますよ。ロシア人で北京大学の講師になった方(白系ロシアの盲目のエロシンコ氏)が家に居候(いそうろう)していた事もあったそうです。父は愉快な人ですがちょっと変わった人でもありました。困った人とか、お金が無い人たちを無料で診てあげたこともあります。そして戦争が嫌いな人で、私はなんて非国民なのだろうと思つて嫌だと思つたこともありましたが、今考えると父の考えは正しかったと思うのです。

私たちは、終戦までは優雅な生活で幸せでございました。しかし、終戦を境目にしてがらりと変わりました。上海の街では日本が負けたというので、三日ぐらい前から爆竹をあげて祝っていました。上海は外国人の共同租界の街で、フラン

ス租界とか日本人街などいろいろ分かれていて、情報が早かったのですね。それで爆竹が鳴っていたのです。終戦と同時に家の物がみんな持っていかれました。略奪に近いですね。もうほとんどとね、持っていくのです。うちの中にも、中国人がずかずかと入って来ました。父は呑気な人でしたから、取られる方が悪いんだと言って父が座っている前の引き出しを開けて、物をとられても絶対に抵抗しませんでしたね。終戦の時、父は七十才くらいで相当シヨックだったらしく、体調を崩しました。「わしは日本には帰りたくない、どうせ日本へ帰っても、お寺の庭掃きかなんかになるしかないんだ」と言っ、帰らずにその後父が上海で亡くなったのです。

日本軍は、やはりひどいことをしたのではないかとも思います。戦争というものは人の気を狂わせるものです。ですからまあ、いたしかたないことだとは思いますが。敗戦後、堪えられなくなり自殺した日本人もいるくらいです。私どもは中国の人とも仲良くしていたので、本当に複雑な気持ちでした。

私たちは、当時引き揚げで帰る人たちのおにぎりを作ったあげたりして、昭和二十四年まで残っていました。国交が回復するまで、なんとか頑張りたいと思ったのですが、いよいよ、共産軍が進行して来ましてね。当時、結婚して子供も二人いて教育も受けることができないううでは困ると思、泣

く泣く両親の遺骨を両腕にかかえ背中に子供を背負ったり、手を引いたりしながら帰って参りました。

引き揚げ後も、色々と苦勞をしました。生活基盤もなければ、何もないところへ帰って来ましたでしょ。それで夫は、一応就職しましたが、長く続かなくて転々となりました。大阪へも行きましたが、結局東京へ戻ってきて、ちゃんとした就職が出来て落ち着きました。



中国 戦時下の上海市

北朝鮮からの帰還

村瀬 俊夫

(父の仕事で北朝鮮へ)

僕が小学校一年の時、姉と両親と4人で今の北朝鮮に行きました。父親が、鹿島建設で働いていて仕事の関係で行きました。今の平城から、黄海の海の方へ、汽車で一時間半ぐらい行った鎮南浦(チンナンポ)です。そこから新安州に移り終戦を迎えまして、その時は小学校六年でした。小さな町でしたから、日本人が幾らもいなかったんですよ。たまに空襲はありましたよ。たまに空襲だよなんていうと、一万メートルぐらい上空をB29が飛んで来ました。建築会社だから測量する器械がありますね、あれでこうやって見ていました。近くに大きな川があります、川で泳いでいたとき、川の鉄橋が爆撃されもう驚いて急いで帰った覚えがあります。終戦を前後した時期でしょうね。アメリカの飛行機もたまに来ましたし、ロシアも戦争が終わる少し前に、いきなり参戦して爆撃に来るようになりました。

(終戦で全てが変わる)

日本人が支配していた終戦までは、大名の生活ですよ。終戦の八月十五日になって、周りが全部変わってね。それまでは、朝鮮人も日本語をしゃべっていましたが、一切、日本語をしゃべってはいけなくて事になりました、全て朝鮮語になりました。僕は、学校で友だちと朝鮮語を話していましたから、言葉は出来ましたね。日本人の学校は、一学年がそれぞれ四、五人で、全校三クラスでした。一年と二年が一緒、三年と四年が一緒の教室、五年と六年が一緒の教室で、五年が授業の時は六年が自習やって、六年を教えている時は五年が自習、そんな学校だったんです。戦時下は何でもなかったけども、急に日本語を使えなくなりましたから、母が買物に行く時は、僕と一緒に通訳して(笑)。それで買ったんですね。

終戦直前ですか、ソ連が入ってきてお米等の穀物を持って行かれるので駅へ貨物の監視に行きました。今で言えばアルバイトみたいなもので、親父が朝から一日ずっと行って、僕の二十才の姉がちょっとした事務みたいなことをやって、僕が新聞配達やっていたわけですよ。僕が一番、新聞配達でお金を稼いでいました。家族は終戦になって、小学校の講堂、次にお寺に強制収容されました。冬はマイナス30度にもなる

寒い地方ですので本当に部屋の中でも寒い思いをしました。収容された人は100人くらいで子どもも7、8人いました。日本人の老夫婦が箱根八里のうたと雨降りお月さまの唄を教えなくて今でもこの2曲は覚えています。

また周囲にはソ連の兵隊がいっぱい来ていて、ようするに女性を狙って来るわけです。当時は、子供だからわかりませんでしたけど、今になってわかります。小学校の講堂から校門まで針金をずっと引っぱって見張りをしていました。小学校の講堂だから舞台がありますよね。舞台の下に後から穴を掘って、布団を入れて女性が隠れていました。校門の方に見張りが出て、校門の方にソ連兵が来ると、針金を引っぱって鈴を鳴らすわけです。来たぞって。穴の中に女性が逃げて、講堂の中に男と子供だけ残って、そんな暮らしが2年くらい続きました。食べ物もほとんど自由になりませんでした。

(南朝鮮に密航)

それである時、日本人が結束して町から南朝鮮に逃げようってことになったのです。時々、満州から女の人が、子どもを連れて逃げて来るんですね。その人達が子どもを連れて荷物や物を背負って来ますから、疲れちゃって、休ませてあげますけど、泊める場所がありません。その人達にご飯を食べさせ

てね「南朝鮮へ行きます」と、歩いて行った人々を、何人も見ていたので、逃げようという事になりました。日本人も、お年寄りもいれば若い人もいる、それで若い連中ばかりで逃げようと、話がまとまって、決行したんですよ。そしたら、残っているお年寄りが警察へ密告しやがった(笑)。「逃げろっ」て、僕らが逃げたのですが、歩く道のりを事前に話していたので、その道に警察官が待っていました。捕まって、豚箱に入れられ、翌日収容所に戻されました。そうしたら、そこに警察官で、日本の大学を卒業した人がいたのです。少し偉い人でね、「あんた達そんなに帰りたいのか、じゃ俺が何とかしてやるよ」と、闇船(正規の航路ではなく、密航船)を手配してくれました。そのかわり、大金を払いました。

それで、もう船と言っても、羅針盤も何にもない。ただの泥舟みたいな塩を輸送する船に30人近く乗って出たわけですよ。船頭も行き先も知らないんだから。それで川から海へ出て、今度は黄海を南へ南へ行くわけです。陸からはそんなに離れてませんから、陸を見ながら行けば、南朝鮮へ行くんだろうと。一週間で、南朝鮮に着きました。月夜のいい晩だったんですよ。飛魚は、ボンボン、ボンボン飛んでいるしね。こんなでつかいクラゲが、船の下を通るしね。そしたら、我々みたいな船が、結構いました。北朝鮮から逃げてきた人

が、船と船とが近寄って、挨拶をしてね。同じような境遇の人がいました。それがどこだかはわかりませんが、引き潮の激しい浜でしたね。引き潮になって動かなくなりました（笑）。向こうに陸が見えますし、しょうがないから、ぬかるみの中を一時間以上かけて、歩いて陸へ上がりましたら、アメリカ軍がいたのです。「どこから来た」と言うんで、「北朝鮮から来た」と言って、それで三十八度線（北朝鮮と南朝鮮の国境線）の開城（ケソン・北朝鮮との国境の街）と言う大きな町があったんです、そこに、百以上のテントがあつて、難民をみんな収容していました。着いて直ぐ、DDT（粉末の消毒薬）で消毒です（笑）。

（南朝鮮から東京へ）

京城（ソウル・大韓民国の首都）で一週間、京城から今度トラックに乗せられました、仁川港に連れて行かれました。仁川港でもテント生活でした。ご飯は、麦八分、米二分ぐらいで、朝と夜二食でした。一週間ぐらい居たのかな。日本への引揚船が、毎日、毎日入つて来るのですよ。入ってきたら、木に登って「船が来たぞ」なんて、今度は誰、今度は誰の順番と。それで一週間ぐらいで米山丸という船に乗せられて、三日かけて長崎の佐世保に着きました。佐世保へ着いたら、

またDDTかけて、検便をしましたが一人が何か変な菌があるって言われて。全員、足止めされて、船が港の外に出され錨を下ろして一ヶ月半ですよ。その間、何回も検便やり三回ぐらいやったのかな。もう何でもないと行って、その後、佐世保から引揚列車に乗せられて、途中広島に着いたときはもう何もなかったのです。今でも覚えています。東京へ着いたのは、昭和二十一年の十月でした。全部覚えてますよ。

軍隊生活

匿名希望

私は昭和十九年に召集があり千葉の歩兵部隊に入隊しました。そこで十日ぐらい訓練を受けて、その夜密かに貨物船に乗せられ関門トンネルを通過し朝鮮半島に渡り上海に着きました。上海からは、二十八里ぐらい離れた蘇洲に向かいました。そして蘇洲の兵団に一週間ぐらいいて、常熟(じょうじゅく)県常熟市と言う所の第五中隊・歩兵部隊に入隊したのです。常熟市で訓練を受けながら、大きな作戦はありませんが、たまにテロみたいな事件がありました。私たちは朝起きて四人で城内の門を開けて村人を入れます。村人は、何もないと城内に入って、雑穀や産物を売るわけですよ。村人の男性は、皆かごを背負っていました。かごの中は大豆とかの雑穀と土地の産物が入っています。我々も二人でちゃんと警護すればいいのですけど、たまたまよそ見をした時に、雑穀の中に拳銃を隠していました、後ろを向いた瞬間に撃たれたわけです。そういうことが三件ありました。我々、銃器も持つてないので無防備なところもあるんです。そういうことで、

六人ぐらい亡くなりまして、本当にもう、悔しくて。戦地へ

行って苦勞したのは大きな作戦はないけど討伐(ゲリラとの戦い)でした。当時の中国戦線は、話し合いで解決しようと言うこともありましたが。その前は大変で、私の先輩が二十七人ばかり討伐でやられたことがありました。河川敷をずっと行軍していた時に両方の丘陵地帯から一斉射撃され、全滅でした。その後、村へ行って、遺体を掘り起こして茶毘(だび)に付して、お骨にして持って帰りましたが、あれが一番大変だったですね。なにしろ銃器でも衣服でも全部剥がし丸裸にして、畑の中に埋められていたのです。村のお年寄りが埋めた場所は教えてくれたので掘ることができたのです。

終戦は蘇洲の本部、兵団司令部で終戦を迎えました。天皇陛下の玉音放送は聞きませんでした。戦争が終結したという連絡が来たわけですね。結局我々はお国のために一生懸命やってきたけれども、終戦を迎えて残念だ、これからどうしようかと。それで、負けた国ですから、中国から、城内を清掃してくれとか言われました。それでほうきを持って城内をきれいに掃除したり、そういう仕事をやりました。終戦後ほとんどの中国の人には、日本はよくやってくれたって感謝の気持ちがありましたね。休日のに煙草持って行って村人にやると、喜ばれましたよ、とても。そういう思い出がありますね。

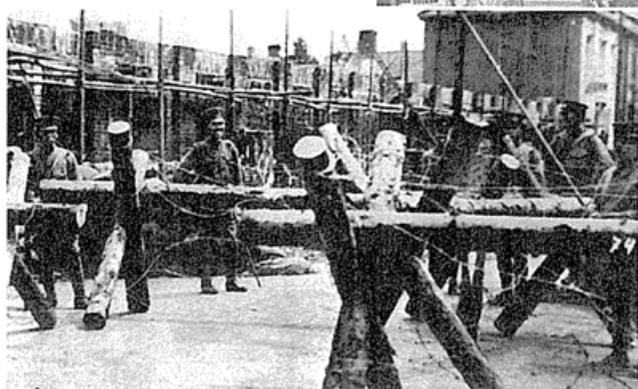
昭和二十二年に、他の部隊は京都の舞鶴に引き揚げて来ま

した。でも我々は、部隊の中に伝染病が出まして、上海で部隊ごと抑留されちゃったのです。そういうことで一年ばかり帰るのが遅れました。ですから帰ってきたのが昭和二十三年の四月でした。

新橋の駅へ降りて、駅のホームから向こうを見ると全部焼け野原。佐久間町一丁目は、燃えなくて大半そのままでした。人がいない所は、焼夷弾が落っこってもそのままでしょう。消す人もいないから廃墟になっていました。今では戦友もみんな亡くなって、江戸川に一人と私と、三人ぐらいしかいません。寂しいですよ。



毎日新聞



毎日新聞